

飛騨びと言の葉綴り

HIDA CITY 20TH
ANNIVERSARY



「美術品が纏った、時代や歴史と文化が交差する知的Museum～日根野美術館」

「日根野美術館&Cafe」の館長兼オーナー、そしてパティシエールの日根野壽子さんを訪ねた。優しい甘さと柑橘系の酸味と苦味が互いを主張し合いながら、見事なハーモニーを口中で奏でてくれる、そんなマーマレードが味わいたくて。本場イギリスの『ダルメイン世界マーマレードアワード』で、『アーティザン(匠部門)』金賞に輝いた逸品である！
壽子さんは1947年、東京都あきる野市で誕生。短大を出ると霞が関の会社に就職。「昔から日本画が好きで、銀座の画廊巡りばかりしてたの」。そこで紹介されたのが、古川町出身で国立病院に勤務する医師、日根野吉壽さんだった。吉壽さんも壽子さん同様、日本画や工芸品など、美術品に造詣が深く、画廊巡りの良きお相手となり結婚。新たな生活が始まった。「主人は日本の美術や文化に大変興味があって、知識欲も旺盛で、そこに惹かれたのかしら？」。

10年後、ご主人の転勤で北海道は洞爺湖町へ。大自然に囲まれ理想郷となった。一方、老朽化した古川の実家も1991年に再建。だが2005年、安寧な洞爺湖での暮らしに暗雲が！「主人は内科医ながら、自分の癌に気付かなくて。亡くなる一月くらい前。主人はこの家が心配だったようで『この先、古川の家はどうする？』って聞いたんです！それで私が『あんなにお金をかけて、あんな家建てるもんだから』って、つい言っちゃって。それっきりこの家の事は、一つ言も口にしなくなって…」その年、吉壽さんは洞爺湖町で鬼籍入り。享年80。「主人の死から、私の2ndステージが始まったの」。北の大地を終の棲家とすべきか、古川に移るべきか、でなければ肉親がいる東京へ戻るか。心は揺れ続けた。ご主人との死別で抜け殻の様になり、悲嘆にくれた。「主人の死を受け入れ、今この時をどう乗り越え、この先どう生きればいいのか…」その後、スクールカウンセラーとして、忙しさと引き換えに寂しさを紛らした。とは言え、脳裏から古川の家をどうすべきか消え去りはしなかった。

「主人が遺した美術品や日本画があるから、小さな私設の美術館でも開けないかなって。日本橋の由緒ある美術商と相談したの。そうしたら『是非、美術館をやった方が良くって』、何だか背中を押されちゃってねえ。やがて頭の中に青図面が浮かんで」。2006年1月、「日根野美術館」開業。

「そうそう、主人が身罷る寸前『塩煎餅が食べたい…』って言ったの？私にしたら、何で今際の際に塩煎餅って思えて。でもそれは主人の故郷、ここ飛騨古川と両親への想いだったのよねえ。『古川なんて、寒くってまっぴらだ』なんて嘸いてたのに、主人の魂はずっとここを離れてなかったんでしょねえ。『あんなにお金をかけて、あんな家建てるもんだから』って、つい言ったことが心残りだね。そう放言した状況を思い出すと、それは全く言葉の暴力そのもの。日を追う毎に、私の心は自責の念に駆られ、罪悪感で胸が張り裂けそうになって。でもそれが終わりの始まり。ちよっぽり罪滅ぼし行脚感も否めないけど、人生と言う名の舞台のエピローグは、やっぱり古川だわ！古川で第二の人生を自分らしく精一杯生きなさいって、自分で自分の心に楔を打ち込んだんだって、そう思えるようになったの。自分の役割もやっと見えて来たし、『晩節こそ美しく彩りたい！』そんな願望もあって、今をこの瞬間を生きようって決めたの。だからこの美術館は、鑑賞していただくだけでなく、美術品が纏った時代や歴史と文化について語り合える、そんな知性の交差点になれたらいいの。それが私の生きる喜びかしら」。小さな小さな美術館には、気高いご夫婦の知的な精神性が、そこかしこに螺鈿細工さながら鏤(ちりば)められていた。



ひねの としこ
古川町 日根野 壽子さん



市ホームページでは、フルバージョンやこれまでの連載もご覧いただけます。

文／オカダミノル
(飛騨市観光プロモーション大使)
イラスト／波岡孝治
(のみながらにがおえ師)

